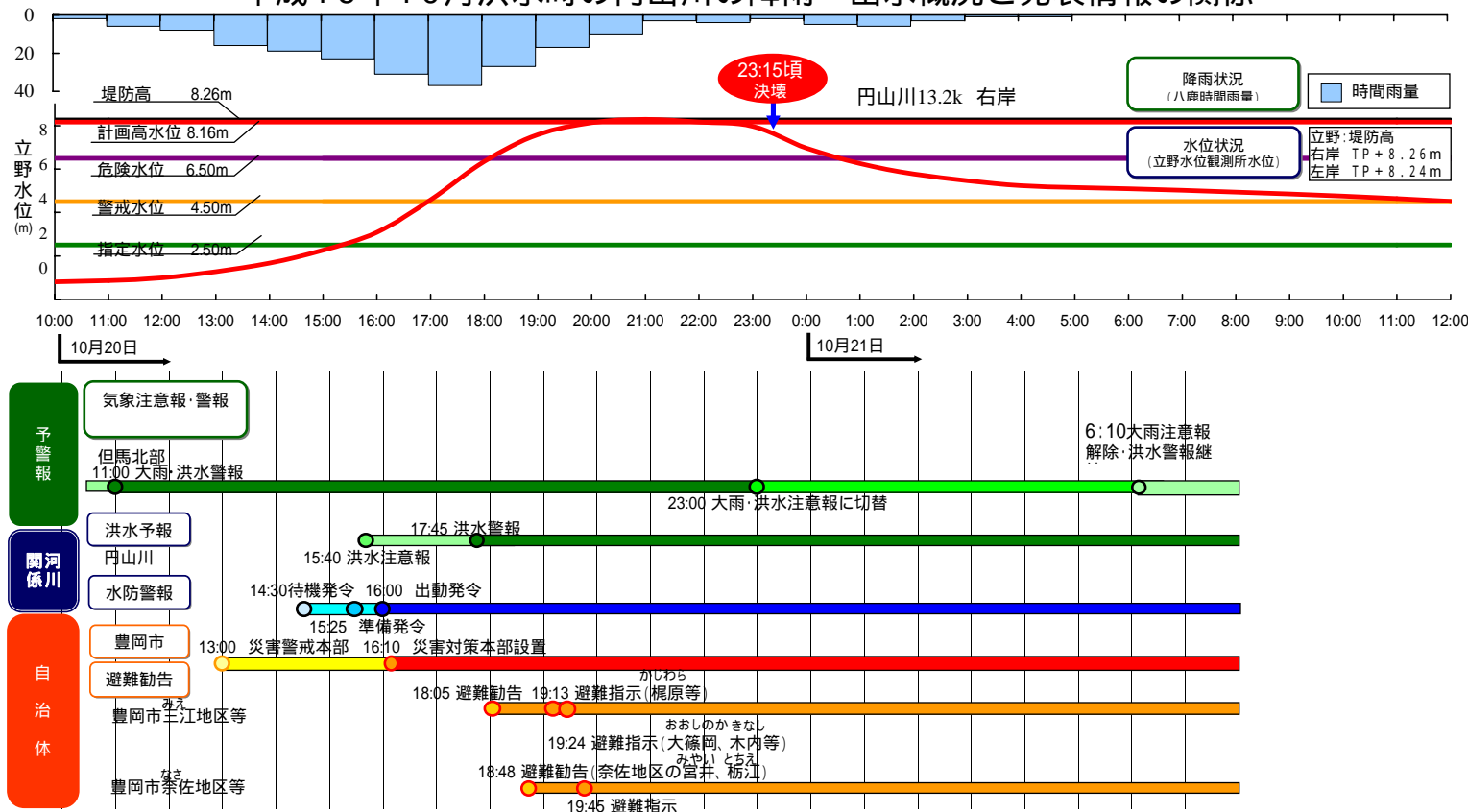


平成16年10月洪水時の円山川の降雨・出水概況と発表情報の関係

(未定稿)



情報と市長の意志決定

11:00	【情報】大雨洪水暴風波警報が出ます。(どこから情報を取得したのか調査中)	
13:00	【意志決定】豊岡市の災害警戒本部を設置しました。(どの情報に基づく意志決定なのか調査中)	
15:50	上流測の出石町と、さらに上流の但東町が避難勧告を発令。但東町の奥赤地区で崖が崩れ、家の離れが一・五メートルふっ飛ばされた。	
16:10	【情報】水は指定水位を越えるところまでできていました。(どこからの情報なのか調査中)	【意志決定】災害対策本部に切り替えます。
16:15	【情報】国土交通省豊岡河川国道事務所の所長から直接私に電話が入ってきます。「今のまま雨が降り続ければ、二十一時(五時間後)には計画高水位を越えてしまう」	【意志決定】私にはとても信じることはできませんでした。水位は確かに高いけれども、ごく見慣れたものでした。しかも、過去にそんなに速いスピードで水位が上昇した経験を市の職員はだれも持っていません。
(事前)	【情報】一時間後に次の予測を伝えるという話でした	【意志決定】そこで、一時間後に次の予測を伝えるという話でしたので、避難勧告の判断は次の予測を待つことにして、その間に安全性の高い避難所をリストアップしました。病院には「次の段階で避難勧告を出す可能性がある。今のうちにマニュアルに従って避難の準備をしてほしい」という連絡をして国交省からの次の連絡を待ちました。
(事前)	【情報】過去に国土交通省が出した浸水想定区域図では、もし円山川の堤防が決壊すれば、豊岡の街中は二階まで浸水するという数字が出ていました。	【意志決定】したがって、まず堤防近くの避難所を外し、三階建て以上の強固な建物を洗い出しました。そして、その建物の管理者に連絡を入れて避難所に指定することの了解を取り、職員を派遣していきます。同時に、老人ホームや病院には「次の段階で避難勧告を出す可能性がある。今のうちにマニュアルに従って避難の準備をしてほしい」という連絡をして国交省からの次の連絡を待ちました。
	上流の但東町で、橋と川沿いの国道426号線が流された。	
17:00	【情報】警戒水位を突破。(どこから情報を取得したのか調査中)	
17:40	【情報】国交省の所長から電話が入ります。「十九時には計画高水位を越えてしまう」	(17:45) 【意志決定】災害対策本部で議論をして避難勧告の決定をした
18:05	【情報】いざというときにどう放送の仕方をするのか、そのマニュアル原稿をつくっていませんでした。	【意志決定】(どういう伝え方をするかを一から考えなければならない。その原稿作成に手間取ってしまいました。)避難勧告を発令し、防災行政無線で「市内全域に避難勧告を発令する」という放送をします。災害対策本部で議論をして避難勧告の決定をしたのは十七時四十五分、その間私たちは何をしていたのか。実は、放送原稿をつくっていませんでした。マニュアルとの関係で見ると、避難勧告の発令は早かった。しかし、結果としては遅かった、そう言えるかと思えます。
19:00	【情報】危険水位を大きく越えます。(どこから情報を取得したのか調査中)	(19:13) 【意志決定】事態はさらに進んでいるということで避難指示に切り替えます。
19:20	【情報】国土交通省から豊岡市に対して排水機の停止依頼が入ります。私自身そのとき初めて知ったのですが、計画高水位よりも一メートル低いところまで水位が迫れば、国交省管理水域のポンプはこれを停止するという内規が定められていました。	【意志決定】他に選択肢はありませんでした。ポンプの停止を職員に指示し、ポンプは順次停止されていきます。
19:45	【意志決定】避難指示を拡大します。そして防災行政無線を使って、「排水ポンプを停止しなければならない事態になりました。急激に内水位が上昇します。直ちに避難をしてください」という放送を改めて行います。(どの情報に基づく意志決定なのか調査中)	
19:59	【情報】すべてのポンプが停止をし、内水によって街中が水浸しになりました。(どこから情報を取得したのか調査中)	
20:35	【意志決定】「危険水位を大幅に越え、各所で堤防の水が越えています。内水位も急激に上昇します」という放送を流します。(どの情報に基づく意志決定なのか調査中)	
21:00	【情報】円山川の水位がピークの八・二九メートルを記録します。(どこから情報を取得したのか調査中)	
21:30	【情報】堤防決壊現場よりも数キロメートル上流の土洲地区で堤防が決壊したという情報が入ります。	【意志決定】大騒動になりました。しかし、消防団が現場に急行してみると、確かに水は堤防を越えていましたけれども、決壊には至っていませんでした。誤報だとわかって私たちは安堵したわけですが、これが後に私たちの判断を誤らせることとなります。
23:13	【情報】消防団員から災害対策本部に「堤防が決壊しました」という報告が入ります。	【意志決定等】災害対策本部はまた騒然となりました。先の誤報もありました。本当に信じていいのか。そこで専門家に確認をさせるということで、消防団員に確認させます。
23:15	ついに円山川の右岸、立野で堤防が決壊します。	
23:17	【情報】消防本部から「間違いありません。確かに堤防は決壊しています」という報告が入り、	【意志決定】私たちはいわば嫌々ながらも堤防決壊の事実を認めることとなります。
23:45	【情報】「決壊」という衝撃的な言葉を使った方がいいのか、「破堤」というある意味穏やかな印象を持つ言葉を使った方がいいのか、どこどこに避難の指示を出すのか。	【意志決定】(その原稿を書くのに手間取りました。)防災行政無線で「堤防が破堤しました。水位が急上昇します。二階以上の高いところに避難してください」という放送を流します。ここでも放送までに三十分かかっています。後で私たちの大きな悔いとして残ることになりました。
	その後、災害対策本部は機能不全に陥ります。できることはもう何もありませんでした。ボートは市役所にありました。ところが、堤防決壊によって避難を求めている場所との間には二本の川がありました。六方川は激しくあふれ、道路も水に浸かり、流木がどんどん流れてきている状況でとても渡ることはできませんでした。何もできない。ただひたすら朝を待つしかない。	
	【情報】堤防決壊現場のすぐそばでは七人の家族が屋上で助けを求めています。(どこから情報を取得したのか調査中)	【意志決定】自衛隊、海上保安庁、兵庫県にヘリコプターの出動を要請しましたが、暴風雨の中、しかも夜間、「出動できない」という返事でした。
(事前)	【情報】県が主催する災害担当実務者研修会にオブザーバーとして出席していました。その際、「災害のどん底に人々がいるときに、トップはみんなの前に姿を見せなければいけない」と言われたことを思い出しました。	(3:45) 【意志決定】初めて自分でマイクを持ちます。ろっぽうがわ「円山川本流と六方川の水位があと十五センチ程度で同じになります。同じになった時点で水門を開きます。私たちも全力を尽くします。皆さんも大変ですが、頑張ってください」
6:50		【意志決定】再び私が放送をします。「陸上自衛隊が到着しました。間もなく活動を開始します。県の防災ヘリ、そして消防救助隊も到着の予定です。皆さんももう少し頑張ってください」これで多くの市民が平常心を取り戻しました。

災害発生後の状況

多くの人々が自宅に取り残されました。自衛隊、消防の応援隊、地元消防、消防団による懸命の救助作業が続けられます。

当時の豊岡市で私が避難勧告を出した対象は約四万三千人、市が設置した公式の避難所に逃げた人は約三千八百人でした。**一割に満たない数字でした。これが後で大問題となります。**

人命救助が終わった後に私たちを待っていたのは**ごみと泥との闘い**でした。

しかし、これらは本当はごみではありませんでした。あの台風に襲われる迄は市民の大切な家財道具であり、書籍であり、あるいは思い出のアルバムでした。

(ごみの仮置き場で)畳などはたちどころに発酵して七十度から八十度の温度になり、素手では持つことができなくなります。煙ももうもうと上がり、火災の危険がありました。悪臭もしました。

現場でしか得られない様々なノウハウも獲得しました。例えば、たくさんの冷蔵庫がごみとして出てきました。しかし、実は冷蔵庫は真水でしっかり洗って乾かせばほとんど動くそうです。

(消防庁にいた友人からのアドバイス)「ボランティアセンターをすぐに立ち上げる。**ボランティアが入ってくるかこないかによってまちの明るさが全然違う。**」

人間が生きていく上では様々なものがが必要です。バラの花のように、あるいは音楽のように、**私たちの心に直接働きかけて心を和らげたり、鼓舞してくれるものも同じように大切だ**ということを私たちは学びました。

市長が「災害で得た教訓」と考えられているポイント

- ・物理的な備え（堤防の整備、内水対策、遊水地の確保、森林の保全） 制度的な備え（救助から復旧・復興までの体系的な法制度整備、生活再建支援制度の充実、応急対策・生活再建・産業復興に関する総合支援プログラム、現場からのノウハウの集大成） 意識・態度の備え（地域の自然の特徴を知る、防災・減災意識の醸成（自助・共助） 災害・危険情報システムの充実、リアリズムに徹した災害対策訓練、政策責任者の危機管理研修）の三つの備えが大切。
- ・人間の力や努力を越えた自然の脅威は必ずやってくる。このことを忘れてはならないと思います。
- ・そしてそのときは、「逃げる」です。もうこれしかありません。
- ・人は逃げない。逃げないものだということを前提に、ではどのようにしたら逃げてもらえるのかという、その技を私たちは身につける必要があります。
- ・もっと小まめに情報を出しながら、危険の度合いが徐々に高まってきている、どんどん高まってきた、いよいよもう大変だ、そのことを実感してもらえよう放送の仕方をする必要があった。そして、冷静な言葉ではなく、緊迫感を持った言葉で伝える必要があったと思います。
- ・行政にも限界があります。そこで今、率直に市民にお願いしているのは、自分の命は自分で守ってくださいということです。
- ・最大の教訓は、「人と人の絆こそが人間を救う」ということです。